

得



佐賀県...が残る

使った手法も...だ。「南白江藤新平実伝」によると、江藤は指名手配写真につ

江藤新平 皮肉な第...

肖像

九州・沖縄

株式市場は安倍晋三首相の経済政策「アベノミクス」に沸き、新規上場企業も増えてきた。不動産会社の広田商事(福岡市)は起業家支援施設を運営し、地元企業の上場を後押しする。「ワクワクすることをコツコツと」。社長の広田稔(49)の目標は福岡発の新規上場企業20社だ。

広田商事社長 広田 稔氏

ひろたみのる 1963年(昭38年)福岡市生まれ。86年福岡大法卒、和光証券(現みずほ証券)入社。94年広田商事取締役、99年から現職。一般社団法人九州ニュービジネス協議会の理事なども務める。

「人生の岐路に立ったとき、自分にとって厳しい道を選んできた」。九州産業大学(福岡市)で昨年6月、学生らを前に講演した広田は半生をこう振り返った。証券会社を経て家業の不動産会社を継ぎ、起業家支援事業を立ち上げた。「これまでの道のりは挑戦の連続だった」

創業ビジネスの漁業から転じた広田商事には約50年の歴史がある。広田が同社に入ったのは20年ほど前。当初は駐車場開発を手掛ける子会社に配属され、物件の掃除や草刈り、経理など「仕事を覚えるために何でもやった」。ただ、「なかなか自分の立ち位置が見付からない」というもどかしさも感じていた。

社長継ぎ早々 本業が転換期に

大きな転機は入社6年目。不動産事業を本格的に始めた2代目社長の父が急逝した。広田は広田商事取締役として業務に精通し始めた矢先、社長の椅子が回ってきた。ちょうどその頃、事業も転換期を迎えていた。福岡市内約30カ所に保有するオフィスビルなどの不動産は老朽化が目立ち、テナント誘致も思うように進まなくなっていた。何

福岡にベンチャーの巣を



か目新しいことをやらないと駄目だ」。不動産活用法に思案を巡らせる毎日だった。

そんなある日、東京証券取引所が新興企業向け株式市場「マザーズ」を新設。元証券マンの血が騒いだ。「福岡からも(同市場での)新規上場が生まれるかもしれない。福岡発のソニーやホンダを育てたい」。福岡市を拠点とするベンチャー企業も目立ち始め、「これらが集まる

『巣』のような場所を作れないか」と思い立った。

こうした拠点は今こそ「インキュベーション(孵化)施設」として普及しているが、「当時の福岡には起業家育成のための施設はなかった」。東京の既存施設を視察したり、起業家や会計士らと設備や運用方法などについて議論したりと試行錯誤を重ね、2000年7月に同市中心部の自社ビルを丸ごと起業家

支援施設に衣替えした。

「困ったことがあれば、何でも相談してほしい」。大学時代にテニス部主将も務めた広田は根っからの親分肌。そんな広田のもとにベンチャー企業経営者が続々と駆け込んできた。その中から、ソフト開発のビジネス・ワン(現ビジネス・ワンホールディングス)や、住宅リフォームのEMビーエスなどが福岡証券取引所の新興企業向け市場「Qボード」に相次ぎ上場し、巣立っていった。

ワクワクを コツコツやる

広田の施設には助言役のコンサルティング会社や会計事務所も誘致し、これまでベンチャー企業100社以上が入居した。自身は黒子に徹し、「ワクワクすることをコツコツとやりた」。福岡を拠点とする新規上場企業を「30年までに20社つく」という目標を達成できるか。それは不動産賃貸とベンチャー企業育成というハードとソフトを融合した広田流のビジネスモデルの成否を占う試金石にもなる。

西部支社 高野社一 写真 善家浩二

堀川

北九州市や福岡県中間市などを流れる堀川は、九州

産

江戸期の開削 石炭運ぶ

で中断時期もあったが、1804年にほぼ現在の姿にと、堀川の運河としての利